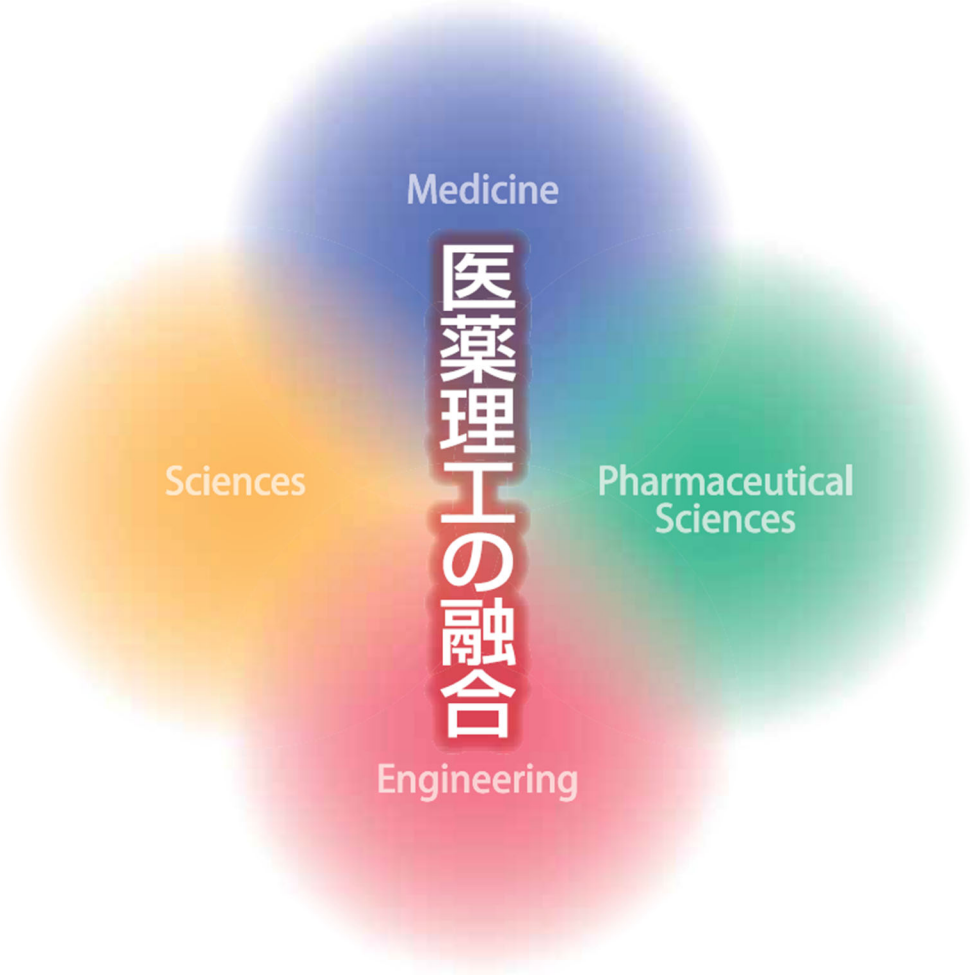
# 令和６年度　富山大学大学院
# 生命融合科学教育部ＦＤ研修会報告書

令和６年１２月１２日（木）




大学院生命融合科学教育部

# 目　　次

巻頭言

１．実施要項・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１

２．参加者名簿・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２

３．資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３

４．全体討議まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４

５．アンケート結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５

# 生命融合科学教育部　令和６年度　ＦＤ　報告書　巻頭言

本年度の生命融合科学教育部（以下「本教育部」）のＦＤ研修会は、昨年に引き続き対面形式で１２月１２日に開催された。日本では少子化が進んでおり、大学学部への入学人口はこれから大幅な減少が想定されている。その中で大学の規模を維持するには大学院の入学者を増やしていく必要がある。そのため本教育部でもこれまでに学生獲得に向けた積極的な活動を行ってきた。また、大学院教育の充実のために本学では「令和の大改革」として令和４年度に大学院修士課程が大幅に改組され、本年度からそれに対応した新しい博士課程、博士後期課程もスタートした。新しい大学院では従来の学部の壁を超えた分野横断型の教育プログラムを取り入れ大学院教育を充実させ学生にアピールしているほか、大学全体で大学院説明会を開催するなど、大学院進学率の向上に取り組んでいる。これまでに大学院の入学者数という観点からは一定の成果は得ているが、個々の大学院については入学者が安定しているとは言い難く、引き続き学生獲得のための取り組みが求められている。

本教育部の大学院生には外国人留学生が多く、これは言い換えると日本国内の大学からの大学院進学率はまだ低く、ここには大学院入学者増加の「伸び代（のびしろ）」があることを意味する。そこで本年度のＦＤでは主に日本国内の大学からの大学院進学を増やすことを目指し「どのようにして国内大学から大学院生を獲得するか」をテーマとして実施した。

本ＦＤでは、最初に趣旨について教務委員長である伊藤哲史先生から説明があり、引き続いて学術研究・産学連携本部の馬場隆彦ＵＲＡの紹介で塩野義製薬株式会社の福島民雄氏に企業が博士人材に何を求めているのか、また博士号取得者が企業の中でどのようなキャリアパスを歩むのかをご説明いただいた。教員には企業経験がないものが多く、企業で博士人材がどのような期待をされているのか、大学院卒の人材が実際にどのように働いているかなど非常に新鮮なお話を伺うことができた。企業が博士号取得者に求めている能力は新たな問題を発見し、それを解決し、他者に説明する能力であり、まさに研究によって培われる能力でもあることが分かり少し不安が取り除かれたように感じた。

その後、学術研究・産学連携本部の加藤由美子ＵＲＡに大学院生となった学生がいつ頃、どのような経緯で大学院進学を検討していたのか、そして大学院進学してからどのようなことを感じているのか、よい点はもちろん、困ったり悩んだりしている点などもまとめて紹介していただいた。こちらは事前に現役の学生を対象にアンケート及びインタビューを行ったもので、学生が教員には直接答えにくいところを加藤ＵＲＡに踏み込んでいただき生の声を集めてもらったものである。今後大学院生獲得に向けた活動をする際にどの学年にアプローチするべきか、大学院生への指導においてどのようなことを考慮すべきかなどについて重要な指針を得ることができた。

大学院生の獲得についてのみならず大学院教育について多くの示唆を与えられた有意義なＦＤとなりましたことを、ご協力いただいたＵＲＡの皆さま、塩野義製薬の福島様、大学院生の皆さま、そしてご出席頂いた教員の皆さまに感謝申し上げます。

令和６年 12 月

大学院生命融合科学教育部長　　高雄　啓三

１．実施要項

令和６年度生命融合科学教育部ＦＤ研修会実施要項

日時：令和６年 12 月 12 日（木）１６時３０分～

会場：杉谷キャンパス共同利用研究棟６階会議室

テーマ：「どのようにして国内大学から大学院生を獲得するか」

内容

国内大学からの大学院生をどのようにして増やすかについて、具体的には本学の大学院進学率をどのように上げるかや、他大学から大学院生が進学してくるようにするためにはどのようにすればよいかについて、URA からの情報提供を受けて検討する。

１）開会挨拶（高雄教育部長）
２）本 FD の趣旨と進行についての説明（伊藤教務委員長）
３）国内大学出身者を対象としたアンケート結果の概要について（加藤 URA）
４）全体討論（司会：伊藤教務委員長）
５）閉会挨拶（黒澤副教育部長）

企画趣旨

学部定員が削減されることを見越し、大学院の入学を増やしていくことが求められている。学生の供給元として国内大学と国外大学が考えられるが、それぞれ具体的な方策がかなり違うと思われるので、今回は国内大学に絞って学生獲得策を検討したい。国内大学からの学生獲得の際の要点は２点、本学からの大学院進学率を高めることと、他大学からの進学者を獲得することにある。これらの点を踏まえ、本 FD では国内大学からの大学院生獲得の方策について URA の協力を受けて検討する。

２．参加者名簿

個人情報により省略

３．資料

学内資料により省略

## ４．全体討議まとめ

近い将来、本学の学部定員が削減されるのは確実であろうと予測されており、減少する学部定員の分、大学院生を増やすことが求められている。このためには、留学生を増やすだけでなく、大学院に進学する国内大学の学部学生を増やしていくことも重要である。今回の FD では後者、国内学生の進学を高めていく方策について、URA の協力を受け、大学院学生の生の声を取り入れて議論をおこなった。本学において、学部から修士課程への進学率は十分に高いと言えるが、修士から博士課程への進学率は低い。このため、博士課程に進学をするか否かについての決断がどのようにされたのかについて特に注意が払われた。

博士課程へ進学を決めたきっかけとして、研究内容への興味はもちろん大きいが、それだけでは将来の不安を拭い去るのは不足である。代表的な不安として、（１）博士課程における経済的不安、（２）博士課程取得後の就職についての不安、（３）博士課程を修了できるかという能力的な不安、が指摘された。

第一の不安について、博士課程に進学する年齢では多くの同級生が社会人として給料をもらっている一方、進学した場合は学生を継続することになるため、経済的な不安から進学を選択しない学生は多い。博士課程に進学を決めた学生の中には、JST SPRING 等の生活費支援の存在が決め手になったというものもおり、今後もこのような競争的資金の獲得していくことの重要性が改めて確認された。

第二の不安について、ゲストで参加された塩野義製薬の福島民雄氏が話された、博士号取得者に期待する能力や活躍が期待できる分野についての情報を学生に共有していくことが有用であると考えられた。また、学生の中には博士課程修了後の就職先を修士の時点で確保することに成功しているものもおり、このような博士採用に好意的な会社・業種を把握しておくことも有用であろう。

第三の不安について、博士課程においては未知の現象に取り組んでいく覚悟と一定の能力が要求されるのは事実であり、これらを備えていない学生を無理に博士課程に勧誘することは好ましくない。しかしながら、十分に能力を持つ優秀な学生が自己の能力を過小評価することはよくあることであり、このような学生の不安を解消することができれば進学を促進することができるだろう。解決策は簡単ではないが、近しい人が博士課程に進学していれば不安は低減するだろう。個々の研究室で博士の進学者がでてくれば、それが呼び水になるであろうし、研究室間の交流が盛んになれば全体としての呼び水効果が期待できるだろう。関連して、今回 FD に参加した大学院生の中に、学会の若手の会に参加している人がいたが、このような会に参加を促すのも学生の不安を和らげる役に立つのではないだろうか。

博士課程進学率向上は簡単な課題でなく、ゆえに定石のようなものも存在しないわけであるが、今回話題に上がった上記のような点を手がかりとして、少しでも改善していきたいものである。

教務委員長　伊藤　哲史

５.アンケート結果

# 令和６年度生命融合科学教育部FD研修会　アンケート結果

アンケート回答総数　１１人
出席者総数　　１５人

１　2024-12-12の生命融合科学教育部のFD研修会に参加して

| | |
|---|---|
| １．有意義と感じた | 11 |
| ２．あまり有意義と感じなかった | ０ |
| ３．わからない | ０ |

２　今後のFD研修会で課題としたい事項があれば、お書きください。

- 昨日のFDでは本来の「どのように国内大学から大学院生を獲得するか」、その方策についてはほぼ扱われなかったので、もう一度同じテーマでやっても良いかと思いました。
- 研究成果等のマネタイズ ・企業担当者を呼んでのニーズ紹介や情報交換

３　生命融合科学教育部が行ってきた以下の事項で、今後、充実していくための具体的方策があればお書きください。

| | | |
|---|---|---|
| ⑴　異分野基礎実験体験演習 | ５ | ・新大学院でも実施することを期待します。<br>・学部生に向けたラボツアーなども取り入れると良い。<br>・生命融合の学生がほとんどいなくなってきたので、生命融合の科目としてはやめてもよいのではないでしょうか？<br>・FDで指摘があった自分の専門分野以外の経験の有無が参考になると言う話を学生に伝えると良いと思います。<br>・おそらくもう実施はなくなると思うので、医薬理工学環に予算を回して欲しいです。 |
| ⑵　外部講師による特別演習セミナー | ３ | ・継続する。<br>・生命融合の学生がほとんどいなくなってきたので、生命融合の科目としてはやめてもよいのではないでしょうか？<br>・博士進学を修士の時（就活中）に考えた学生が多かったように思うので、修士学生（＋D1）を対象に、企業講師により「博士課程の学生に期待すること」を話してもらうと良いと思います。 |
| ⑶　シンポジウム | ４ | ・継続を希望するが、認知・情動脳科学専攻の行事に偏ってきているので、他専攻からの提案を期待する。最終年度に総括と今後の発展についてシンポジウムを行ってはどうか。<br>・生命融合の学生がほとんどいなくなってきたので、生命融合の科目としてはやめてもよいのではないでしょうか？<br>・とても有意義だと思います。<br>・今後も脳科学研究交流会を続けて欲しい。 |
| ⑷　HPの活用 | ４ | ・こまめな更新が必要ですが各研究室に任されているので、事務的なサポートがあればありがたい。<br>・若い世代ではHPよりインスタグラムが効果的らしい。<br>・現状のままでよいと思います。<br>・学生と企業をつなぐような（企業に学生を紹介するような）HPがあっても良いと思います。研究内容や学会発表、論文など。 |
| ⑸　テキスト(教員の研究概要) | ２ | ・各研究室のHPでの情報更新で対応する。<br>・現状のままでよいと思います。 |
| ⑹　学生主体の研究発表会 | ３ | ・大学院生が一同に会し情報交換する機会なので、継続する。<br>・もしまだ発表をしていない学生がいたら継続する必要があると思います。<br>・ぜひ推進すべき。 |

| | | |
|---|---|---|
| ⑺　他領域の副指導教員制度 | 2 | ・継続する。<br>・現状のままでよいと思います。 |
| ⑻　障害学生の受入れ対策 | 2 | ・制度は残して継続する。<br>・現状のままでよいと思います。 |
| ⑼ 英語による授業 | 3 | ・継続する。<br>・現状のままでよいと思います。<br>・充実させるとともに、日本人の英語力向上のための機会（国際機構主催イベントなど）を増やすことが必要だと思います。 |
| ⑽ その他 | 1 | ・生命融合科学教育部が終了するタイミングで、これまで行ってきた取り組みが、予算を含め新大学院で継続されることを希望します。 |

4　2024-12-12の生命融合科学教育部のFD研修会に参加して、提案されたいことやお感じになられたことを自由にお書きください。

・URAの方の意見を参考に人を増やすために、大学で就職トレーニングを公に行い、それを売りに大学を宣伝をするということだったのでしょうか？最初の部分の話し合いの狙いがわかりませんでした。

・我々の大学院時代の教育とは大きく異なってきており隔世の感があるが、現代的に対応することの重要性を学んだ。本来のテーマであった国内大学からの大学院生を集める方策としては、まず本学の他学部などからの大学院進学生の確保と企業からの大学院生の受け入れが必要と思いました。

・企業側の視点を知ることができて有意義であった。

・発言者がやや偏っているように感じましたが、学生の意見を聞くことができたのは良かったと思います。

・博士を採用している企業の声を今後も聞いていきたいです。

・学生アンケートのなかで「研究が思うように進まない」ことが進学時の不安になっているとのことであったが、この点は半分以上は教員側の問題であるため、この辺りの改善が博士課程の進学を後押しすることにつながると思いました。

・とても有意義でした。

・非常に良かった。録画していないのがとても残念。シオノギの方のお話は学部や修士の学生にも聞かせてあげたい内容だった。同じことを教員が説明しても説得力がない。企業の担当者の言葉として学生に聞かせたかった。

・塩野義製薬の研究者の方のお話は大変貴重であった。大手企業が博士学生を重宝していること、博士課程進学の重要性を改めて理解できた。一方で、富山大学の学生すべてが大手企業を目指しているわけではない。例えば生命工学の修士学生の多くは、中小製薬企業の、しかも開発職や品質管理職への就職を希望する。逆に言えば大手は書類選考で落とされ、中小にしか行けない現実がある。そのような企業が果たして人材としての博士学生を希望しているのか、現状を知りたい。
研究のモチベーションが高い学生は、やはり博士課程に進学している印象を受けた。逆に博士課程を考えていなかった学生やモチベーションの低い学生を、博士に進学させた具体的な方法がもしあれば、どのようにして博士に進学させたのか成功体験者の先生のお話を聞きたい。